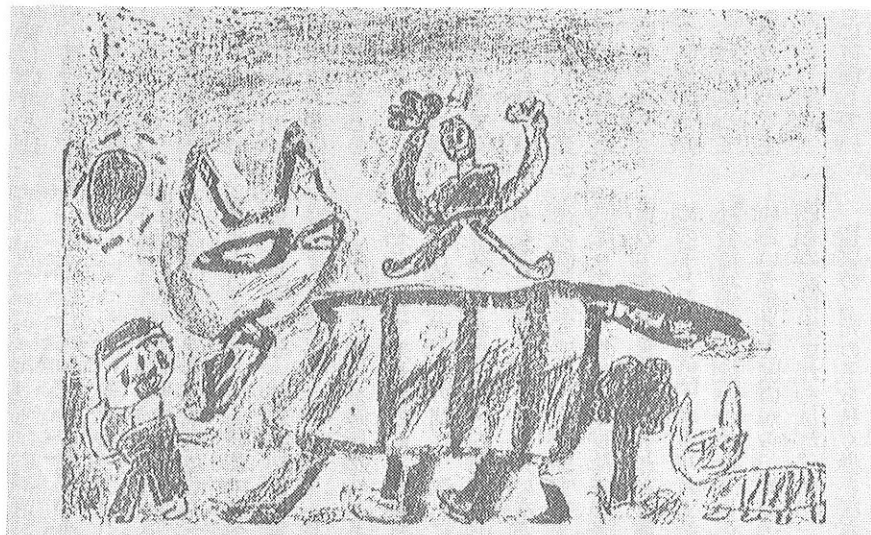


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京3-128022
印刷／(株)ドモン企画



2年 高山 うれし

とらと
おはなししてるぼく

貧に処し富におる道（ピリピ 四章十二節）

理事長 福島 勲

使徒パウロの最後はローマで投獄された。その生活の様子は詳らかでないが、ピリピの教会は心配して、何らかの必要と思われるものを贈っている。

これに対してパウロは感謝し、しかも今後さらに迷惑をかけないよう気を配って、自分はどうな境遇にあっても満足することを学んだ。貧しさにも富におるにもすべて処する道を心得ている、と書きおくっている。

彼はユダヤ人であるが、ローマの市民権をもつ家柄で相当な暮らしだったと思われる。

キリストのために、地位や財産や栄誉栄達の道などすべて放棄した。

マークトウエンの乞食と王子のように、富める者が急に乞食の生活をする、乞食が突然に王子になっても共に、耐えられるものではない。

人生の秘義を把握し、人として

完成した徳の備わった者でない限り金を持たせれば紀国屋文左衛門のような違い方、貧しければベニスの商人のシャイロックのように、金、金と金の亡者に墮してしまふ。

急に富裕になった日本も品格が伴わないゆえに、富における道を弁えない。道義や責任を覚え、いたずらに遊興にふけり、自己にだけ幸いを求めようとする。

鈴木大拙が松下幸之助氏発行のPHPPに対してこれは間違っている、繁栄による平和と幸福のP（Prosperity）は貧しさのP（Poverty）でなければならぬと批判した。

禅師のいう真実の貧しさにおける道を心得て、しかる後、平和と幸福ということも一応理解できるが単なる貧しさは単なる繁栄と同様に、これらからすぐに平和や幸福が生じてくるとは思えない。

イエスは幸いなるかな、心の貧しい者 天国はかれらのものである

るといわれた。心の貧しい者とは無知蒙昧の者でなく、真理を求めて謙虚、自己の空しさを知る真理の探究者である。

イエスはまた、富める者は禍たすでに慰めをうけているといわれる。(ルカ六・二十四)

富に執心し、富だけを誇る者はそれだけで報いを得て、まことの生命に達し得ない禍である。

中国の詩人、白居易は、人は蝸牛のような小さい世界に住んで、何を、何で争うのか。富に堕し貧しさにしたがつて、しばらく歎嘆せよ。大きく口をあけて笑わない者は痴人だと詠っている。

富と貧しさの意味と価値について十分に悟られ、これに処していく基本的信仰の秘義に立って生活したいものである。

さて、常に貧しさに直面しているわれわれ、また施設もこれに処する道を心得ているのか。

かりに富むようなことがあっても、それなりに奢ることなき営みができるのかどうか、厳粛に内省しなければならない。

天に宝をたくわえる

施設長 今関 公雄

この地で五度目の春を迎え、一番年上の子どもがいよいよ中学へ進みます。十年一仕事を切実に実感させられる昨今です。

この四年の歳月を振り返り、よくぞここまで来たものだ感慨もひとしおです。この間に、次々に押し寄せてきた累々たる困難の山々を思うとき、見えざる大いなる神の御手を感ぜられます。

たった三人のキリスト者福祉職員、この「本当の意味での子どもたちの子ども」の施設をキリスト教社会福祉実践の証として設立したという祈りと願いから、光の子どもたちは生まれました。

聖書の「光の子らしく歩きなさい」(エペソ五・八)に因んだ施設名がそれを表しています。

生育歴に組み込まれている理不尽な重荷を担い、家族や親とさえも一緒に暮らすことができない子どもたちも、本来的に神の子として、掛け替えのない「輝き」を与

えられているものである。その本来的な「輝き」を何よりも大切に護り、育んでいくことを決意し、祈り続けていくものであります。

保母が五名以内の子どもを責任を持って担当し、寝食を共にして暮らしを創る世帯となり、一軒の家に独自性を持つ二世帯が生活していく共同体を形成する家庭的養育を目指します。こうして、人格形成の土台となる愛情・所属・自己尊敬の欲求などが、自然に充足される家庭養育に限りなく近づけ、子どもが持っている「輝き」を大切にしていくのです。

定員三十名は、日本では最小規模の入所施設であり、経済的に割高になりますが、養育内容を高めるためには少ない人数が有利です。施設運営の責任を持つ者として、この養育形態を維持していくための国・県の基準を大きくはみ出す人的・物的・経済的な負担が頭の痛いところであります。時折

合理化や省力化への誘惑にかられますが、手間ひまかけなければ子育てはできない道理です。

施設設備の整備から人件費までの、公的負担の枠外の経費は、寄付に頼り日常的なとりくみでは職員員の献身的な働きに依拠しながらこの働きを維持して参りました。

かなり乱暴な運営ですが、手をかけ慈しみ育てる職員に励まされ、祈りながらの日々が続きます。

夜を日に継いで労苦を惜しまない職員たち、日を重ねて豊かに深まっていく子どもたちの表情の輝き、それらを継続し展開していくために必要な努力をしていく時、私たちの思い傾いを超えて全ての必要が満たされてきました。

「天に宝をたくわえなさい。あなた達の宝のある所には、心もあるからである。」と聖書にあります。私はこれ迄の歩みで、「心のある所に、宝も備えられる」と教えられました。子どもたちの全ての労苦が天国に豊かな宝として貯えられると信じます。「心」を捧げ尽くしたいと思えます。

エッセー

父の背中

黛 執(俳人)

私は父に背負われていた。

広い父の背中が私の目の前にあった。真夏の暑い日盛りのことで父は上半身裸であった。父の背中は汗でじっとり濡れ、その汗のた

めに私の体がずれ落ちそうになると、父は立ち止まって私を撥ね上げた。振り落とされまいと、そのたびに私は父の肩にしがみついた。色白で妙にぬめぬめした父の背

肌の感触であった。その父の背の上の方に大きな雀斑(そばかす)があった。硬質はどの濃い褐色のその秦野染みを、私はおそろおそろ指でなぞった。

私たちがたたらに川音があつた。しばらく川音に沿い、やがて木橋を渡って私たちは対岸に出た。私が三・四歳のときのことである。私たち一家はそれまで住み馴れた家を引き払って、向岸の新しい借家に引っ越すことになった。その途中の記憶の断片である。なぜか、その父の汗ばんだ背中だけ

が、いまでも私の記憶の底に焼きついていて。あの大きな雀斑のせいであろうか。

父はやさしい人であった。反対に母はきびしく恐い人であった。幼いころ、母からはよく打たれたが、父からは一度もない。私はこの父がたまたまなく好きであった。

父は無類の酒好きであった。夏の夕べなど、湯上りの父がああ雀斑を浮き上がらせた背を見せて晩酌はじめると、私はその父に張りつくように坐って、「つまみ」の塩豆をせがんだ。

私が物心つくようになって知ったことだが、父はまた無類のお人よしであった。人に頼まれると気軽に借金の保証でも何でも引き受けてしまう。その後始末はいつも母がさせられた。道楽者で女遊びもはげしく、母はすいぶん泣かされたようだ。母の強さは、だらしない父から一家を守るための必死の武装だったのだと、後年私は

思うようになった。

学校を出て東京のある会社に勤めて間もなく、私は父が背負いこんだ多額の借財の始末のために郷里に呼び戻され、やむなく家業を継いだ。それから二十年、私は妻帯し子を設ける中で就職と借金を返しつつあった。が、父の素行は一向に納まらなかった。

しだいに私は父を疎むようになっていった。憎んだと言った方が正直だろう。

七十六歳のとき父は何度目かの心臓発作で倒れ、今度は助からな

いと私は医者から宣告を受けた。酸素吸入など出来るかきりの手は

尽くしたが、日に日に父は衰えていった。痴呆症も併発していった。疲れ果てた妻に代わって、夜中の介護を私が受けることになった。ある夜、父の病床の脇で不覚にも寝入ってしまった私は、鼻を突く異臭で眼を醒ました。すると父は寝床の上に全裸で起き上がり自分の排泄物を体といわず寝具といわずなすりつけているのであった。思わず私は、父の背中を平手で打った。父は虚ろな眼を私に向

け、「あまり邪険にするなよ、俺にもよく分らないんだ」と哀願

した。強く打ったつもりではなかったが、父の背には私の掌の打痕がくっきりと残されていた。あの大きな雀斑のすぐ下であった。

それから日ならずして父は死んだ。しばらくのあいだ、私の掌の痕跡を残した父の背が私の脳裏から消えなかった。

父が死んで早くも十六年が過ぎる。父の血を引いて酒好きの私は父とおなじようにいま晩酌を好む夏の夕べの風呂上がりのビールはやはり半裸がいい。「つまみ」は塩豆だ。

「そうしてお酒を飲んでる姿は、お父さんそっくりよ」

後ろから妻の声が出た。私はギリとした。

「背中に雀斑はあるか」

「いっぱいあるわよ」

「親爺のようなでっかい奴か」

「あんなに大きいのはないけれど・・・」

私はホッとしたあと、何とも奇妙な寂しさにおそわれていた。

虹の国から

犬

二年生 山城 滋

帰り道
近所の犬がついてきた
ぼくが歩いていたら
ぼくの足の上に前足をのせた
くすぐったかった
いつしよにあそびたかったけど
家の人にかえしてやりました
ぼくも犬が欲しいな

☆虹の国からは、子どもの作品を発表してきました。特に出来の良いものをというのではなく、その時の子どもの成長の状態を表すものとして載せてきました。それまでの生活状況が子どもの成長へどう影響していたのか、そして、かわりによってどう変容していくのかを考える手立てになればと思っています。もちろん、飾りのない子どもたちの願いや思いをお伝えすることが目的の第一ではありますが・・・

「光の子」編集委員会

えなかった「家族」に、たった二週間ほどの間に宿泊まで実現したのです。準備の期間が余りにも少な過ぎたと思っていましたから。ニコニコ顔の溪子ちゃんを約束の最寄りの駅まで連れて来て下さったお祖母さんと、お正月のようすなどを電車を待ちながら伺いました。叔父さん伯母さんがやって来て、溪子ちゃんの従兄弟たちとにぎやかに過ごしたようです。すっかり孫の顔になった溪子ちゃんと溪間を縫って走る可愛い電車に揺られて幸せな色に二人は染まって新しい年を始めました。四ヶ月ぶりのパパと水入らずの時を過ごして帰って来た高雄君は「泊まって行って」とパパにねだりました。「夕食を」「出来れば泊まって」と私たちもお願いしました。お風呂にパパと入った高雄君はすっかりその気になってしまいました。パパが「すいません、これから夜の間に仕事が入ってまいります」と小さい声で言います。高雄君が寝つくまでということ。高雄君は中々寝つきません。そのうち

パパが眠ってしまいます。ちゃんと寝るかどうかわからないのでしばらくして起こします。やはり帰るということで、直接、高雄君にパパが「これからお仕事だから帰っていいか」と聞くと、歯をくいしばった高雄君が、「うん」。玄関のドアが閉まりパパは帰って行きました。抱き上げると高雄君は声を上げて泣き崩れてしまいました。布団に入っても泣き続ける高雄君。「高雄はパパの宝物だって」とパパが言ったことを泣きながら話します。泊まれないことが分かっていながら曖昧にして、高雄君に期待を持たせた対応を心から反省しながらそのまま一晩高雄君と一緒に眠りました。高雄君にとってパパは心の支えです。想いを重ね、こらえきれなくなると睡眠中の指吸いが激しくなります。私はパパにはなれませんが、一生懸命に支え補わなければなりません。春、様々な生命の息吹が聞こえます。子どもたちの輝きに映し出され、支えられ補われながら押し出されてこの年を歩きます。

現場から

輝きのかたち

その六

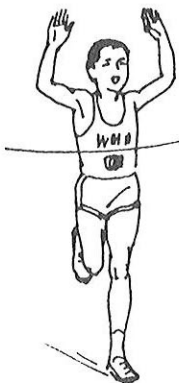
池田 祐子

一九八九年は、私のグループのみんなが、お家に帰って迎えることができませんでした。高雄君も一志ちゃんも、そして、家族や親族のかかわりなど全く考えられませんでした。父さんお祖母さんと一緒に家で年越しをすることが出来たのです。この稿の「その五」の終わりの数行にクリスマスや正月への期待と願いをこめて報告しましたが、クリスマスをはかえた十二月の半ばに実直で暖かい心をお持ちなのが一目でわかるような素敵なお祖母さんが長い時間をかけて溪子ちゃんに会いに来て下さいました。そして、寒いクリスマスの夜もお二人はやって来て、溪子ちゃんや私たちのクリスマスを一層素敵に下さったのです。片道三時間以上かかる遠くから・・・です。クリスマスページメントで天使を演じる溪子ちゃんはその姿を舞い上がるようでした。数日後に、同じ方向に訪ねる家族があり、私は菅原先生と一緒にでかけたついでに、山を背にした南向きの丘を通る国道ぞいのお祖母さんのお家を訪ねました。年末の忙しい時期に二度もお出で下さったお礼を表したかったからです。お茶を頂きながら話は年々始まることに進み、ついに「できれば、一晩だけでも・・・」という事になったのです。溪子ちゃんの喜び壊れそうな顔を想いながら、私は感動で胸が塞がりました。大晦日の日に菅原先生が車でお祖母さんのお家へ連れて行って下さいました。二日のお昼ごろ私が迎えに行くまでの間、何回も何回も「大丈夫だろうか」「よい子にしているだろうか」「お祖母さんたちに「もう、こりこりです」とか「何と行儀が悪い子どもだ」とか叱られていないだろうかなどと考え、落ち着きませんでした。六年もの間、殆どかわることさ

ぼくの自慢

五年生 山形 睦男

ぼくの自慢は、マラソンを朝早くから毎日していることです。なぜマラソンをするかと言うと、足が早くなるし、来年の駅伝の選手にもなりたいたいこと、体をきたえたいからです。毎日少しずつ始めています。マラソンのコースはいろいろ考えてたくさん決めています。中でも一番たいへんなコースは、家から大沢商店の横にある神社まで行ってくるコースです。二キロメートルはあります。あそこまでと思っても苦しくなると、とてもかけられません。目の前が真っ暗になりそうです。息がつまりそうです。いやになります。歩きたくなりますが、もう少し、もう少しと、自分に言いながら我慢して、がんばります。そうすると、家まで予定の時間に帰ってこられます。たまにやらない日があるけれど、これからも、ずっとずっと続けていきたいです。冬は寒くてやりたくなりますが、寒さに負けずにがんばってやっています。



現場から

光の子らしく 16

岩崎 まり子

けむりたつような春雨の中、白い梅の花が楚々と咲きはこらんでいます。全ての生き物たちが色づき始め、生命を謳う季節がやってきました。

この一年で、子どもたち一人ひとりがどんなに頑張りを、成長してきたか、また、これからの成長の課題は何なのかについてのチェックを今、大急ぎでやっています。来年度いっばい一回りする自然の時間の中で、子どもたちの力や心が強く大きく成長し開花することを願うための準備と計画のために。

子どもたちは大人の想像を超えて成長していきます。昨日出来なかったことが、今日はできるようになったり、昨日と同じようなやりとりで満足できない子どもたちの姿があるのです。

しばらく来訪しない親を思い、「お父さん、明日くるかなあ」とつぶやく子どもに「お父さん、お仕事忙しいのかもねえ」と相づち

を打ってあげることで、心が一段落してくれるのにも、限界があるのです。一日、一日、子どもたちは見えるようになり、真実を探る目を遠慮なく大人たちに向けようとするのです。

先日、子どもたちが兄弟の話をしていたときに、算君が「僕、弟が欲しかったな。でも、お母さん病気があったから、もう赤ちゃん産めないんだって」と残念そうに言いました。

「そうだね。赤ちゃんの代わりにお母さんが死んじゃったなら、いやだもんね」と何の気なしに私が言う。

「いいよ。だってお父さんがいるもん」と、何の気なしに算君も言ったのでした。へしまったと思いがちながらもショックでした。別々に暮らしている父と母について、不自然なことなのですが、そんなふうに思うようにかかわったことは一度もないのに・・・という思い

上がりを感じながら・・・

算君のこの両親は離婚していて、家族三人で過ごすことは年に三、四回程度です。各々別に来訪があり帰省などもあるのですが、父子、母子で過ごす回数は両足の指を借りても足りないくらいです。そんな環境のせいでしょう、算君にとって「両親」親たちというよりは、「お父さん」「お母さん」それぞれが独立した存在として、選択も可能になっていったのでしょう。そんな中で、彼なりの位置から父母をへ観て、その時の自分の意になかった一方を選んだのだらうと思います。決して冷淡なわけではありません、彼のおかれています環境が、そして、へ観えるようになってきた眼が判断させたのでしょう。

一緒に暮らしていた親が、突然別れるようになり、その一方を選ぶことを迫られたら、子どもは混乱し、選択し切れず、身を裂かれる思いで選んでしまうのではないのでしょうか。けれど、ここにいる子どもたちの多くは、幼くしてその選択を迫られたのです。選択の余地のない選択です。思えば、子

どもたちは、大事な分岐点などの重要なあらゆる局面で、自分で判断、選択など全くとっていいほど許されないのです。

好んで両親の一方を選ぶ理由はなく、施設入所を選んだわけでも担当者として私を選んだのでもありません。

与えられた全てを受け入れ、小さな体で担って・・・私には、どれほどの痛みか、いかほどの涵養さも図り得ません。

こんな訓練を日常的に受けている子どもたちが、豊かに大きく成長できないはずは在りません。もし、仮にできなかったとすればそれは、果たし切れなかった私の私たちの責任です。それさえも自らに引き受けて背負い、生きていかなければならない子どもたち。

いろいろなことが分かり、だんだんへ観るVことができるようになってきて、私たちの不誠実さをも許してくれている子どもたち。その痛みを、重さを少しでも軽減できると思えば、それは、誠意しかないことを確認し、新しい年度も歩き続けます。

養護メモ 20

自立 その三

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、家族によって培われる子どもたちのあらゆる「ちから」を、家族と共に暮らせない子どもたちにも等しく培うことを願って建てられた。

光の子どもの家では開設当初の事情で幼児が多かった。親や家族に愛されて、抱っこされたり甘やかされたりした経験の極端に少ないか欠乏した幼児が殆どだった。いきおい「抱っこ、おんぶ」が関わりの主要な手段で、子どもたちの求める内容であった。今もとりくみの基本が受容であることに変わりはない。養護施設の主要な仕事は、愛情飢餓への対応なのである。「抱っこ、おんぶ」に象徴される「受容」を主な対応として続けてきた光の子どもの家の取り組みは、学童が半数を超えた昨年あたりから「自立V」へ対応の内容をずらしながらしてきた。

子どもたちが、何にも依らないで自分の「力」で生きていかなければならないことは自明のことであり、社会的自立は、養護施設の目指す最終目標なのである。

この一年の間に、子どもたちの成長の目標や課題の克服などを、基本的生活習慣、学習、社会性・遊び、健康・安全、家族関係など十数項目について計画を立てて取り組んできた。それらを二月いっぱい反省・評価し、新年度の計画を三月半ばまでに作成する。その個人別養護計画を家毎に総合し家の計画とし、各家の計画を統合して全体の事業計画にする。それに基づいた予算案と一緒に理事会に提案し承認を受けるのである。

この個別養護計画の作成の過程で、社会性や情緒、総論などで自立への目標設定が随分目につくようになった。一九八九年度には学童が二名となる。自立への願いは切実なのである。

広田厚文は学童有志の朝のジョギングにはいつも真先に走りだすのだが、学校では二年かかってまだクラスに入り切れていない。

幼稚園の年長さんは小学校入学となる。二km余りの道の登下校に備え、仲間意識を養成し学級活動に抵抗なく入れるようになることを願って、七人を一緒にしながら誕生祝に歌を歌ったり、ディズニのビデオを見たり、お手伝いを一緒にしたりしながら、三月はじめから毎朝一km余りのジョギングを学童と反対回りで始めている。

一緒に走りながら子どもたちの「できるよつになること」のはやさに驚かされている。朝、起きることに三〇分以上もかけてグズグズし、駆け出すまでに一時間もかかっていった子どもたちが、二週間を過ぎた時には六時十五分には七名全員が揃い玄関をスタートし、十分後には息をはずませてうっすら汗をかいて到着するようになった。春は名のみの風の冷たさは、小さい彼らには残酷にさえ思われるが、一緒に走ることを楽しみにし「明日も走ろう」と土曜日の走

り終えた後でせがまれたりもして内心ヒヤリとさせられる。もう新聞配達のお兄さんたちとも顔なじみになった。

助けを借りずに出来ることが多くなることをへ自立Vである。だから、出来なかったことが出来るようになる、みんなが誉め評価する機会をできるだけ多く作る。叱ること注意は短く、誉めたり評価したりは長くみんなの前で。

実習生だった千葉雅樹君が駿東学園に就職が決まり挨拶に見えた時、「自立とは、みんながみんなに依って生きられるようになることだと思えます。そうならなければ障害を持った人たちはいつまでも不公平な状態で生きなければなりません」と言われた。

何にも依らないで生きることが出来るようになることが自立であることは確かなことである。しかし、私たちの誰が言葉の厳密な意味で「何にも依らないで」生きることが出来るだろうか。そのことを正しく認識できるようにすることこそがホントウのへ自立Vなのだろうと考えている。

日誌抄

十二月十六日
一九八九年
二月十五日

十二月十六日 大塚金属KK専務

夫人来訪。沢山の生活用品を。

十七日 大和根町社会福祉協議会

評議員に任せられ施設長出席。

十八日 栗橋ボーイスカウト、栗

橋ロータリークラブ共催のもち

つき大会。たくさんのお品物も。

○子ども会クリスマス会

○子どもたちの一人でも多く家族

と一緒に年越しやお正月をと、

家庭訪問を家族の負担にならない

時間に、夜も昼も駆け回る。

二十日 東京芸術大学の東海林悦

子さんを中心にしたハーブと歌

の夕を今年も。素敵なお品物も

ス音楽のひとつを。山田、伴

加藤のみなさん、ありがとう！

二二日 大和根町東婦人会のみな

さんが今年も沢山の寄付を。

町内会の志と一緒に。感謝。

二二日 加須市の梅沢さんなどの

「しずくの会」のみなさんから

お励ましとご寄付を沢山。感謝

○幼稚園クリスマス会。

○ひよんなことでお付き合いの飯

野氏、今年も沢山の小銭箱を。

○泉田氏より光の子どもの家の航

空写真を送った。共に感謝。

○町内、県内、全国の人々からた

くさんのお励ましとご支援が毎

日のように。職員一同 感謝。

二三日 江森理容店、広瀬電気よ

りジュース、ケーキを沢山。

二四日 クリスマス・イブ。ホー

ル兼用の食堂で讃美と感謝のキ

ヤンドル・サービスを。まどろ

んだ頃サンタクロースが一人一

人にプレゼントを。夢の中で。

二五日 お友だち、家族、子ども

たちが直接お世話になっている

人たちをお招きしクリスマス。

礼拝としてのページェントとお

祝いの会を。楽しく素敵に。

二八日 もちつき。千葉本町教会

より沢山の生活用品を。感謝。

二九日 正月帰省を開始。今回は

年末ギリギリまで訪問調整をガ

ンバリ、家族とお正月期間に会

えなかった子どもは五人でした。

三二日 剣道越年稽古。深夜十時

から翌草朝まで汗の小剣士たち。

一九八九年元日。筑波山に初登山

初日の出を観に。九時三〇分元

日礼拝を全職員と子どもたち十

二名で。抱負と第一食を。

四日 帰省からも戻り全員揃いお

正月気分をぶっとばせ！大会を

腹話術と手品の荒巻・北畑さん

も一緒に。今年もがんばるぞ！

九日 三学期開始！様々な思いや

決意を新たに。頼みます先生！

十三日 鳥海商店、共同電器より

お菓子など沢山ありがとう。

十四日 子どもと保育研究会の例

会を。いつも励ましと刺激を。

十七日 江森理容店の整髪、お奉仕。

二二日 東大宮教会の新会堂献堂

式。母教会の益々の働きを祈る

二四日 埼玉生活共同組合より沢

の生活用品を。感謝。

三〇日 個別養護計画の反省と評

価を。次年度の計画のために。

二月八日 県共同募金会へ申請の

軟弱な敷地の駐車場整備計画実

地調査。結果却下。ああ。

十一日 第十八回理事会。補正予

算案審議。承認。

十二日 日基督教埼玉地区青年部

が熱烈にご支援の祈りと献金と。

○堀内和夫氏より乗用車カペラを

いただく。感謝 (くら)

反射光

子どもたちが土手

から菜の花を根こ

と抜いてきて園庭

に植えています☆みなさんいかが

お過ごしでしょうか☆光の子ども

の家もおかげさまで、四年度目を

終わります☆この間の筆舌に尽く

せないご支援とお励ましに心から

感謝致します☆NHK歳末助け合

いへ三十万円で暗幕とスライド機

器の申請は暗幕部分のみ十八万円

の援助☆六三年度の共同募金会へ

申請の雨が降るとぬかるんで使え

なくなる駐車場の整備は却下に☆

スライド機器は職員のカンパで揃

ったが駐車場はもう一年待つて☆

それでも受理される保証はありま

せん☆任意の団体か篤志家にお願

いもしよう☆豊かな国だと言われ

て久しいこの国の豊かさにあやか

りたいものです☆そうは言っても

この四年間随分施設設備は整備さ

れ定員の職員も配置できました

☆そしてまた来年度の予算を皆さ

んの善意に信頼し祈る思いで作り

ます☆まいにち政治は足下から頂

点まで☆全くみ返りのない透明な

ご支援を！この年も更に！(哲)